第 233 回　渋谷区と板橋区の日晨上人像

筆者：林　久治（記載：2023 年 4 月 24 日）

（１）前書き

私（筆者の林）は Random Walks （乱歩）という題名で偏屈老人（林久治）の気侭な紀行文のサイトを始めている。私の紀行文では、通常の紀行文にはない、斜め目線からのご紹介を書くことに拘りたいと思います。通常の紀行文に関しては、既に優れたサイトが沢山ありますので、それらをも引用しつつ、ユニークなご紹介を記載することに心掛ける所存です。

一方、私は日本の銅像探偵団（１）のサイト/）の銅像探索に参加している。私は珍しい銅像を探して、探偵団の団長さんに「ギャフン！」と仰っていただけることを目標としている。ここで「珍しい」とは、「①見つけ難い場所に隠れている有名人の銅像。②市井で頑張って人生を過ごしたが、有名人ではない人物の銅像」と言う意味である。私は自宅が東京にあり、孫達が大阪にいるので、主として東京近郊と近畿地方で銅像探索を行っている。最近、私はネット記事を丹念に調査し、そのような「スクープ銅像」の候補を多数見つけている。

武漢肺炎による自粛生活で家に籠っていると、運動不足で体重が増加するし、精神的にも圧迫を感じる。私の銅像探索は不要不急の活動ではなく、私の生存に必要不可欠である。昨年の 7 月は、第 7 波と猛暑のため、私は銅像探索をしばらく自粛していた。しかし、大阪在住の３人の孫達は夏休み前に感染したが軽症であった。そこで、私は９月初旬に大阪に行き、近畿の銅像を探索した。東京に帰ってからも、運動を兼ねて銅像探索を続けている。私の銅像探索記の全ては、２）のサイト/f から閲覧出来ます。

私は 3 月 21 日から 31 日まで、大阪に滞在し孫達の世話をした。その間に、銅像探索も少しは出来た。227 回の記事/f では、その中から大阪市の弘世像の探索記を記載した。228 回の記事/f では、茨木市の奥田光像の探索記を記載した。229 回の記事/f では、京都市の田辺朔郎像の探索記を記載した。230 回の記事/f では、大阪市中央区の林市蔵像の探索記を記載した。

私は 4 月 14 日に渋谷区で花田傳像、呉永石像、及び日本発明振興協会の銅像を探索し、探索記を前回の記事/f に記載した。当日は、探索経路上の乗泉寺にも立ち寄って、本寺の日晨上人像も探索した。本像は１）のサイト/に収録されているが、基本情報が記載されていなかったからである。しかし、本像周辺には有用な資料が無かった。それで、本像の紹介は止めようかと思ったが、板橋区の信泉寺にも日晨上人像があることを発見した。板橋の像は１）のサイト/に収録されていないので、4 月 22 日に本像を探索した。本稿は両像の探索記である。なお、本稿では私の意見などを青文字で、資料の内容などを緑文字で記載する。

（２）渋谷区乗泉寺の日晨上人像

次ページの図１上に、乗泉寺（渋谷区鶯谷町 10-15、以後は本寺と書く）の周辺地図を示す。本寺は渋谷駅から徒歩で約 10 分である。図１下に、本寺の山門付近の写真を示す。本寺は渋谷駅の近くにありながら、広い面積の緑地を有している。

（本文は、３ページに続く。）

図１．上：乗泉寺の周辺地図、下：乗泉寺の山門。

図２上に乗泉寺の境内図を、図２下に乗泉寺本堂の内部を示す。本堂１階ロビーには、１基の立像が設置されていた。

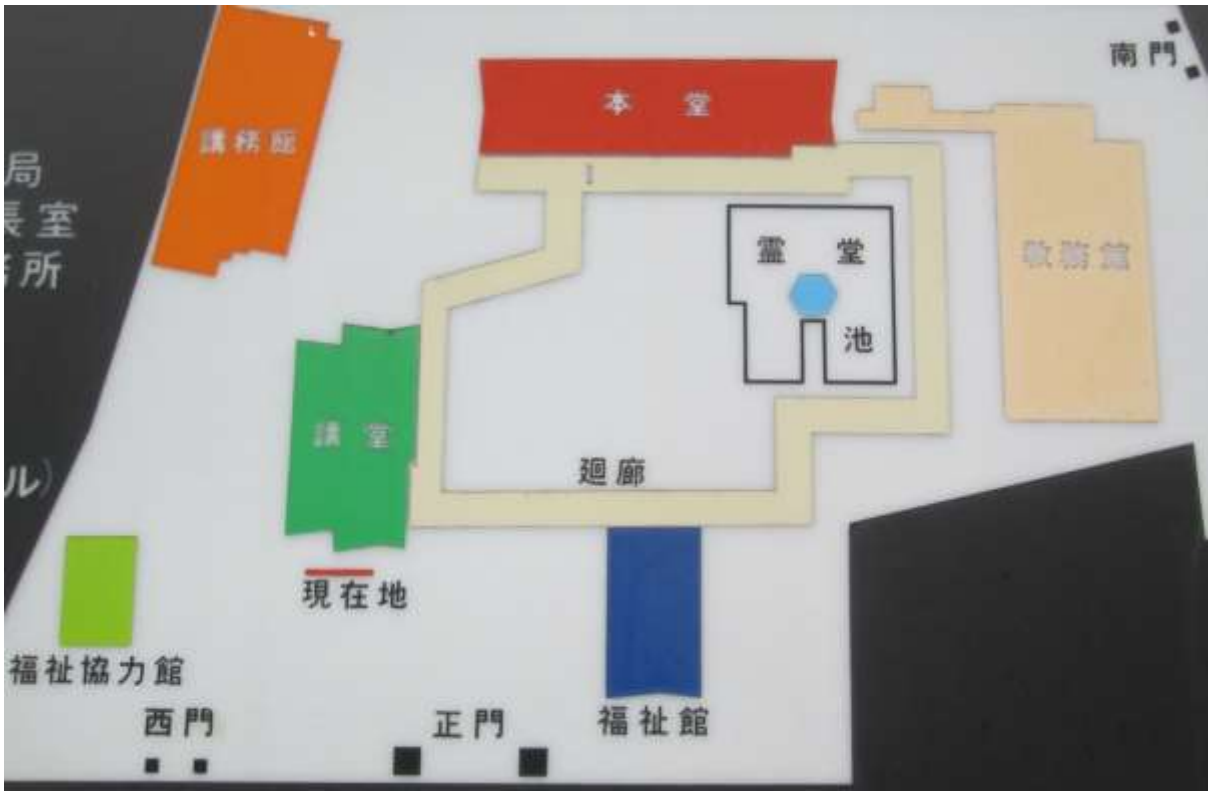

図２．上：乗泉寺の境内図、下：乗泉寺本堂の内部。

図３．
左：日晨上人立像、
右：本像のお顔。

図３左に日晨上人立像を、図３右に本像のお顔を示す。本像の下には題字があり、「佛立第十五世講有日晨上人像」と書かれていた。以上以外に、本像を説明する資料は何も無かった。そこで、私は「佛立とは何か？講有とは何か？乗泉寺とは？日晨上人とはどんな方か？」と言う疑問点を調査した次第である。

本門佛立宗妙深寺 HP の「本門佛立宗について」の項（３）のサイト/）に次のような記載がある。

① 本門佛立宗は釈尊（仏、ブッダ）に始まり、日蓮聖人を宗祖と仰ぐ宗門です。

そして日蓮聖人が定められた南無妙法蓮華経の御題目の御本尊に帰依し、一心に御題目をお唱える修行（口唱行）を根本としています。

②当宗が拠り所とする根本経典は釈尊が最後に説かれ、みずから「これこそ第一の教えである」と宣言された法華経（妙法蓮華経）です。だからこそ、仏（釈尊）ご自身がうち立

てられた宗旨、「佛立宗」といいます。この名前は伝教大師や日蓮聖人が使われていた宗名でもあります。

③本門佛立宗の「本門」とは、法華経 28 品(章)の教えのうち、前半を「迹門」、後半を「本門」という、その「本門」です。迹門の迹とは「あと」、「影」という意味です。本門の本とは「根本」、「本体」という意味です。本門は根本の仏である本仏がお説きになった教え、迹門は、本仏を天の月とすれば、池に映った月の影のような仏である迹仏が説かれた教えという違いがあります。

④日蓮聖人は後半の本門でも第 15～22 章までの本門八品（8 章）を独自の経典とされ、釈尊のあらゆる教えの中心とされました。それは、ここに、釈尊が亡くなられた後、2000 年以降（末法）の人を救う御題目と、これを弘める使命を担った上行菩薩（日蓮聖人の前身）のことが説かれているからです。このように本門八品の御題目を中心とするので本門佛立宗というのです。

⑤本山は京都市上京区北野の宥清寺です。本山の宥清寺は、日蓮門下としては関西最古の寺院で、延慶元（1308）年、日蓮聖人の直弟子であった日弁上人が開創されました。全国に約 300 ヶ寺の末寺や別院があって、種々の行事や儀式、その他、多くの人々の相談に応じ、さまざまな宗教活動や社会福祉活動を行なっています。また、アメリカ、ブラジル、オーストラリア、韓国、台湾にも寺院があり、イタリア、イギリス、スリランカなどにも信者が増え、その他の地域にも広がっています。

⑥日隆聖人は室町時代の至徳 2 年（1385）、今の富山県浅井郡嶋村の館に桃井右馬頭尚儀公の子息としてご誕生になりました。南北朝の戦乱の中、12 歳で入寺得度。天性怜悧な少年であったため、14 歳で帝都京都にでて本格的に仏教を学ばれ、やがて日蓮聖人のおしえの真髄は、法華経本門八品にあらわされた、上行菩薩の伝える御題目にあることを覚られます。

⑦日扇聖人〔長松清風 1817―1890〕は、江戸末期の文化 14 年（1817）京都市蛸薬師通室町の商家、大路家に誕生しました。文芸の才に優れた日扇聖人は、14 歳のときに『平安人物誌（現在の人物年鑑）』の「画」の部に名を連ね、26 歳の若さでひとかどの町人学者として知らせるようになり、歌人、書家として名を馳せます。将来を約束された日扇聖人でしたが、母の死と自らの大病をきっかけに仏教各派の研究ののち、法華経本門八品上行所伝の御題目の信仰に目覚め、32 歳の時に淡路の法華宗隆泉寺で出家得度します。しかし、幕府の檀家制度によって堕落状態であった当時の法華宗や仏教界にとって、文化人として名を馳せ仏法に精通し、民衆の救済に身をささげようと求道の志に燃える日扇聖人の存在は目障りなもので、様々な弾圧にかかります。それでも日扇聖人は、久遠本仏の使者、日蓮、日隆の正統をつぐ後継者という志を胸に、安政 4 年 1 月 12 日に「本門佛立講」を開講されます。本門佛立宗では、門祖日隆聖人滅後 430 年余り、その法義・宗風が絶えようとする時、本門佛立講を開らかれ、正しい信心の道へと導いてくださったという意を込めて日扇聖人のことを「開導聖人」ともお呼びします。

「神殿大観」の「本門仏立宗」の項（４）のサイト）に、次のような記載がある。

本門仏立宗（ほんもんぶつりゅうしゅう）は、長松日扇を開祖とする日蓮宗日隆門流系の教団。本山は京都市上京区の宥清寺。幕末の設立で戦後の独立。正式表記は本門佛立宗。講有は過去には宥清寺住職とは必ずしも一致しなかったが、現在は宥清寺住職を兼務する。その地位を「講有位」という。「御講有」と尊称される。現在の任期は 4 年。退任後は「講尊」と呼ばれる。第一世講有の日扇聖人（長松清風、在職：1857-1890）は、本門仏立宗開祖。「開導」「開導聖人」と呼ばれる。第十五世講有が田中日晨（在職：1962-1966）である。

乗泉寺の略歴は、５）のサイト/に次のような記載がある。

①乗泉寺は、江戸時代元和年間（1615 年頃）に京都妙蓮寺末として、江戸西久保に一庵が建立されたのがはじまりです。さらに三代将軍家光の頃、麻布桜田町（材 木町・現在の六本木ヒルズの場所）に移転 し、戦後までこの地にありました。

②江戸幕末から明治中頃までにかけては、時勢の流れでさびれた時代もありましたが、日歓上人（田中清歓師・佛立第八世講有、1869-1944）が明治 34 年に住職となり、御題目口唱第一の信 心に徹し信徒にご利益をいただかせながら 弘通活動に大いに励み、信徒は日に日に増 加し今日の大乗泉寺の基礎を築かれました。

③その後、日晨上人（田中清長師・佛立第十五世講有）が日歓上人の後を受け、戦前戦後の復興期に信徒を奮闘激励し、宗内随一のご弘通のお寺を築きました。境内地は、戦後まもなく麻布から現在地の渋谷に移転し、そして今日にいたっています。

なお、「弘通」は「布教活動」の意である。

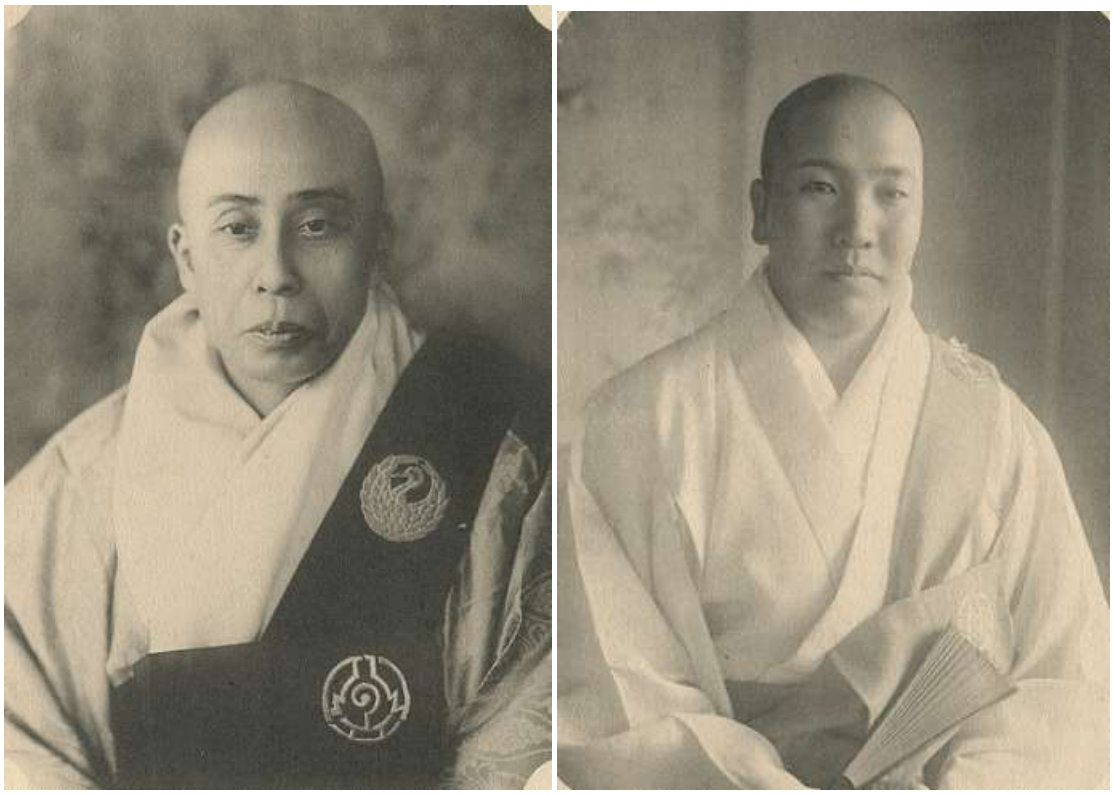

図４．左：日歓上人、右：日晨上人（1927 年 5 月の新本堂開筵式にて）。

本図は、６）のサイト/より借用。

日晨上人の写真、本図は、６）のサイトより借用。

７）のサイトには、日晨上人の経歴を次のように記載している。

①日晨上人（本名：田中清長）は、1899 年 10 月 26 日、東京府麻布区竜土町でご誕生、佛立第四世講有日教上人より「清長」（せいちょう）と命名されました。東京府立一中在学中、十六歳で乗泉寺において日歓上人のご剃髪をいただきました。1921 年より受持ご奉公を拝命し、1923 年には早くもその資質を認められて副導師に任命され、恩師・日歓（にち

かん）上人のご息女「愛子様」と結婚され、同年 11 月 12 日弱冠二十五歳にして、乗泉寺第十九世の法灯を継承遊ばされました。

②1927 年 5 月、住職として麻布乗泉寺の開筵式、1929 年 10 月には世田谷別院の開堂式を挙行する等、乗泉寺の寺観を整える一方、教勢の拡大、弟子の教育に類を見ない程の充実ぶりを示し、都内全域は言うに及ばず、そのご弘通は東海道から信越・東北と及び、遠く北海道にまで教線は浸透していきました。その間、1934 年には佛立講の教務長に就任され、1936 年 4 月、恩師・日歓上人の佛立第八世講有位進達式をご奉公されて、1938 年 7 月に本門佛立講副講有に就任されたのです。そして同 11 月には昇進して「信照院日晨」と号されました。

（開筵式は「かいえんしき」と読み、道場やお寺の新築や改修の落成式を言う。）

③やがて太平洋戦争も熾烈を極めた 1944 年 5 月 30 日、恩師・日歓上人のご遷化にあわれ、1945 年 5 月 25 日には、乗泉寺本堂の戦災という悲運にも見舞われました。しかし逆境を克服され、1946 年に早くも復興、開筵式を挙行されました。一方、宗門の一宗独立にも尽力され、ついに 1947 年 3 月、本門佛立宗は法華宗より分離独立を果たしたのでした。一宗独立後、日晨上人は初の宗務総長に就任され、権大僧正に昇晋されました。

④1950 年 5 月、日晨上人は英断をもって旧地麻布から渋谷鶯谷に乗泉寺を移され、仮本堂の開筵式を挙行されました。1955 年にはご内室愛子様の急逝という悲しみにあわれましたが、この時、日晨上人は宗門の中枢にあって、宗制改正の大事業を完了されたのでした。宗門はますます上人の行政手腕に期待を託し、1958 年本宗参議、1960 年に再び宗務総長に就任され、更に 1962 年には日颯上人ご遷化により、講育代務者を拝命されました。

⑤そして同年 10 月には、本宗第十五世講有位を継承遊ばされたのであります。講有ご在位中における業績は、ブラジル弘通を初め、枚挙にいとまがありません。又、和光学園育ての親としても、「泉の光」　の著名人との対話を通じても、対社会的貢献度は計り知れないものがありました。1966 年に講尊となられてからも、「佛立信心像」　「ある角度から」それに「宗風の考え方」等、多<の著述（ちょじゅつ）を残され、弟子信徒の薫育にも意をそそがれて、佛立第十七世講有石同日養上人、佛立第廿二世講有井上日慶上人をはじめ、幾多の人材を育てられました。

⑥1975 年乗泉寺住職ご退任後も、高祖七百回御遠諱・新宗制の制定等、為すことをすべて果たされて、1984 年 8 月 31 日、弟子信徒の晨朝勤行の中、ご遷化遊ばされたのであります。

日晨上人の義父である日歓上人は「田中日歓」と呼ばれているので（4）のサイト）、日晨は日歓の娘と結婚して田中姓になったようだ。日晨の出生名は不明である。しかし、彼は日教上人より「清長」と命名されたので、乗泉寺と関係が深い家に生まれたのであろう。

以上の資料などにより、乗泉寺の日晨上人像の概要は次の通りである。

日晨上人立像

設置場所：東京都渋谷区鶯谷町 10-15　乗泉寺本堂 1 階ロビー

制作者：不明、設置時期：不明、

設置経緯：乗泉寺は、江戸時代元和年間（1615 年頃）に京都妙蓮寺末として、江戸西久保に一庵が建立されたのがはじまりです。さらに三代将軍家光の頃、麻布桜田町（材 木町・現在の六本木ヒルズの場所）に移転 し、戦後までこの地にありました。江戸幕末から明治中頃までにかけては、時勢の流れでさびれた時代もありましたが、日歓上人（田中清歓師・佛立第八世講有）が明治 34 年に住職となり、御題目口唱第一の信 心に徹し信徒にご利益をいただかせながら 弘通活動に大いに励み、信徒は日に日に増 加し今日の大乗泉寺の基礎を築かれました。その後、日晨上人（田中清長師・佛立第十五世講有）が日歓上人

の後を受け、戦前戦後の復興期に信徒を奮闘激励し、宗内随一のご弘通のお寺を築きました。境内地は、戦後まもなく麻布から現在地の渋谷に移転し、そして今日にいたっています。

日晨上人（本名：田中清長、1899 年 10 月 26 日－1984 年 8 月 31 日）は、東京府麻布区龍土町で誕生。開導嗣法第四世日教上人より「清長」と名前を頂き十六歳にて得道。その後九年のご奉公を経て、1923 年には二十五歳で乗泉寺住職に就任。それ以後、麻布乗泉寺や世田谷別院の開筵式(かいえんしき)をつとめるなど寺観を整え、弟子の育成にも力を入れて東海から北海道までの弘通発展に尽力。太平洋戦争中には、日歓上人の遷化や乗泉寺本堂が戦災に遭うなど大変な時期もありましたが、終戦後の 1947 年 3 月には法華宗より独立、本門佛立宗として宗教法人格取得を果たし、さらに、東京が一層発展してゆく将来像を勘案し、1950 年 5 月には乗泉寺を渋谷鶯谷町に移転。日晨上人は数々の大役を宗門より拝命し本門佛立宗の発展にも貢献、その後 1962 年 10 月には、開導嗣法第十五世講有位を継承。講有在任中も宗門の発展に尽力し数々の功績を残した。1966 年には講有位を退任、以後「佛立信心像」「ある角度から」など、数多くの著述を遺して後進の指導にあたりましたが、1975 年に乗泉寺住職を退任され、弟子である日尚上人に後任住職を託した。退任後も、高祖七百回御遠忌や新宗制の制定等数々のご奉公に力を注がれ、1984 年 8 月 31 日に遷化。

（３）板橋区信泉寺の日晨上人像

私は乗泉寺をネット検索していると、関連する寺院として板橋区に信泉寺（板橋区西台 1-13-12）があることを知った。本寺の開基は日晨上人であった。本寺のグーグルマップの写真を見ると、玄関前に日晨上人像があった。本像は１）のサイト/に収録されていないので、4 月 22 日に本像を探索した次第である。本寺は鉄道の駅からは遠いので、私は自宅から東武練馬駅に行き、そこからバス便を利用した。図５に、東武練馬駅から信泉寺（図５の①地点）へ行くバス路線を示す。

図５．
東武練馬駅から信泉寺へ行くバス路線、
①：信泉寺。本図は、８）のサイト/f より借用。

図６.
上：信泉寺の周辺地図、
①：「南西台」バス停、
②：セブンイレブン、
③：信泉寺。
下：信泉寺の正門。

4 月 22 日、私は東武練馬駅に行き、北口から少し先にある 1 番バス乗場から、国際興行バスの東練 05 路線のバスに乗った。本路線は、1 時間に 2-3 本しか運行しないので、発車時刻を調査して行った次第である。東京のバスは、20 世紀には渋滞に巻き込まれるのが通常で、乗車しても少しも進まず、イライラしたことが多かった。しかし、21 世紀になり、東京のバスはスムーズに運行されている印象である。道路整備が進んで、渋滞が解消されたのが原因であろう。

今回は、東武練馬駅前でバスに乗車すると、約 10 分で「南西台」バス停（図 6 の①）に到着した。バス停付近の地図を図 6 上に示す。バス停付近にセブンイレブンの店舗（図 1 の②）があり、その前の道路を真直ぐに行くと「信泉寺」（以後は本寺と書く）に到着した。図 6 下には、本寺の正門の写真を示す。正門は開いていて、モダンな造りの本堂の前に、1 基の胸像が設置されていた。（本文は p.11 へ）

図７．上：信泉寺の本堂前、下：日晨上人像

本門佛立宗の寺院は万人に開放されているので、本寺への入場は自由であった。図７上に、本寺本堂とその前に設置された胸像を示す。その近接写真を、図７下に示す。本像台座正面には題字があり、その写真を図８上左に示す。それには「信泉寺開基　大僧正日晨上人」とあった。

本像背面の写真を図８上右に示す。それには「信慈　日晨」とあった。これは、上人の筆であろう。また、背面には制作者のマークがあったが、私はその意味を知らない。

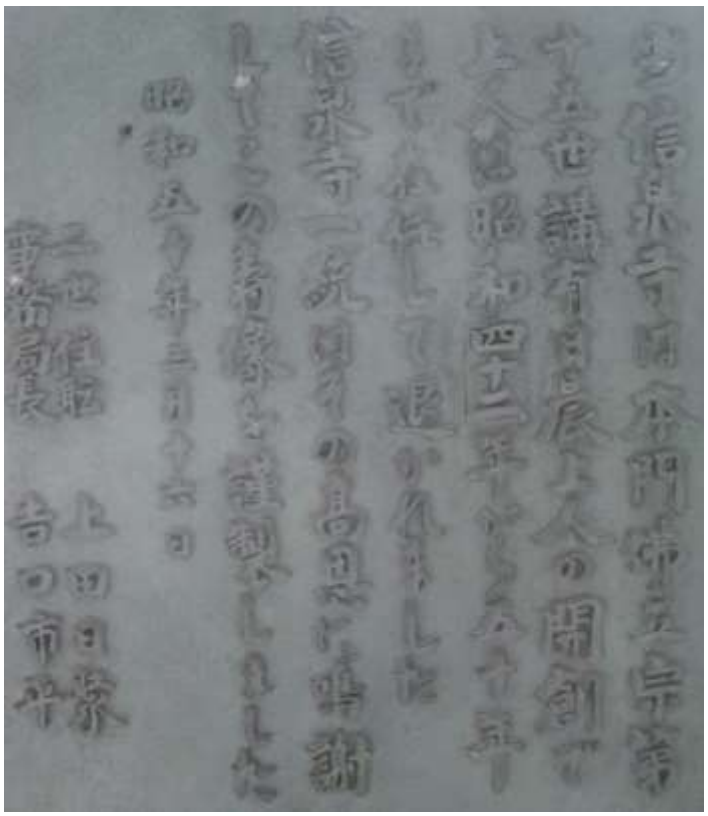

図８.
上左：本像台座正面の題字、
上右：本像背面の彫文、
下：本像台座背面の銘盤。

本像台座背面には碑文があった。その写真を図８下に示す。その内容は、本像の概要欄に記載する。本寺の略歴は、ウィキペディアに記載されている。以上の資料により、本像の概要は次の通りである。

日晨上人胸像

設置場所：東京都板橋区西台 1-13-12　信泉寺本堂前

制作者：不明、

設置時期：1975 年 3 月 16 日

設置経緯：信泉寺は 1966 年に乗泉寺（渋谷区）より分かれて創建。開山は日晨上人（1899－1984）。本像台座背面の碑文には、以下の記載がある。

当信泉寺は本門佛立宗第十五世講有日晨上人の開創で上人は昭和四十二年から五十年まで在任して退かれました　信泉寺一統はその高恩に鳴謝してこの寿像を謹製した

昭和五十年三月十六日　二世住職　上田日聚　　事務局長　吉口市平

参考資料

１）のサイト：https://douzou.guidebook.jp/

２）のサイト：http://masaniwa.web.fc2.com/Ranpo.pdf

３）のサイト：https://myoshinji.jp/about-hbs/

４）のサイト：本門仏立宗 - SHINDEN

５）のサイト：http://jyousenji.org/whatsjyousenji/

６）のサイト：http://jyousenji.org/myosyo/2013/10/14/1600/

7）のサイト：日晨上人について - 妙証だより (jyousenji.org)

８）のサイト：https://5931bus.com/files/topics/1006_ext_03_4.pdf